

吉田秀和

Yoshida Hidekazu

僕のオペラ



吉田秀和

Yoshida Hidekazu

僕のオペラ



海竜社

著者略歴

吉田秀和（よしだ・ひでかず）

1913年9月23日、東京日本橋生まれ。東京帝国大学文学部仏文科卒業。音楽批評家。戦後、批評を発表しつづけ、1953年に刊行した『主題と変奏』で批評家としての地歩を築き、以来、一貫して旺盛な評論活動を展開。1975年『吉田秀和全集』で第二回大佛次郎賞を、2006年には「わが国における音楽批評の確立」で文化勲章受章。現在は、水戸芸術館館長として、音楽、美術、演劇各分野での実践活動を指導。著書に『吉田秀和全集』（全24巻）（白水社）、最新刊『永遠の故郷一夜』『永遠の故郷一薄明』『永遠の故郷一眞昼』（集英社）ほか、翻訳書も多数。

僕のオペラ

二〇一〇年一月二十六日 第一刷発行

著者 よしだひでかず 吉田秀和

発行者 下村のぶ子

発行所 株式会社海竜社

東京都中央区築地二の十一の二十六 〒一〇四-〇〇四五
電話 (〇三) 三五四二-九六七一 (代表)

FAX (〇三) 三五四一-五四八四

郵便振替口座 〇〇一〇-九一四四八八六

ホームページ <http://www.kairyusha.co.jp>

印刷・製本 図書印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

©2010, Hidekazu Yoshida, Printed in Japan

ISBN978-4-7593-1106-8

僕のオペラ

目次

忘れられないオペラ

〈きいてよかった 生きていてよかった〉

カルメンの悲劇 8

ヴィーンのおペレッタ 14

ヴィーン国立オペラ公演『ばらの騎士』 21

南仏の野外オペラ 24

ベルイマンの『魔笛』 31

オペラの舞台裏 39

今度は『椿姫』 46

おすすめの演出

〈成熟した大人の味わい〉

カラヤン／ベルリン・フィル／ラミー、バルツァほか

モーツァルト／『ドン・ジョヴァンニ』 52

マリナー／セント・マーティン・イン・ザ・フィールズ／ポップほか

モーツァルト／『フィガロの結婚』

63

オペラ・ブッフアの完成『コジ・ファン・トゥツテ』

73

『指環』のアクチュアリティ

80

掘り出しもの

〈冒険精神を忘れないで〉

ムーティ／ミラノ・スカラ座

ヴェルディ／『シチリアの晩課』

102

エストマン／ドロットニングホルム宮廷劇場

モーツァルト／『テイトウスの慈悲』

111

レヴァイン／メトロポリタン歌劇場

ヴァーグナー／『パルジファル』

122

グラインドボーン音楽祭

R・シュトラウス／『インテルメッツォ』

134

《コジ・ファン・トゥッテ》愛のかたち

144

オペラ もう一つの楽しみ方

〈最後に笑うものだけが本当に笑う人〉

オペラの闇

152

リヨン・オペラの新しい顔

158

オペラの衣裳

165

オペラの映像化

171

メトロポリタン・オペラ

185

日本人のオペラ

〈小柄であること、表情の違うことが武器である〉

二期会公演『トスカ』

192

二期会公演『神々の黄昏』

195

小澤征爾指揮『サロメ』

198

藤原歌劇団公演『マクベス』 201

二期会公演『タンホイザー』 204

日本のオペラ 207

日生劇場二十周年記念公演『コジ・ファン・トゥッテ』 214

二期会公演『ジークフリート』 217

二期会公演『ワルキューレ』 221

二期会公演『フィガロの結婚』 225

二期会オペラ『メリー・ウイドー』 228

二期会公演『椿姫』 231

二期会オペラ『蝶々夫人』 234

二期会公演『ヴォツェック』 236

あとがき 239

初出一覧 242

装幀——川上成夫

カバー写真——イタリア マッシモ劇場

(c)Alinari Archives/AMF/amanaimages

忘れられないオペラ

へきいてよかった 生きていてよかった

カルメンの悲劇

ピーター・ブルックは現代屈指の名演出家である。一九七三年彼がロイヤル・シェイクスピア劇団をひきいて東京でみせた『真夏の夜の夢』のよかったこと、今も忘れられない。その彼が仲間とつくった『カルメンの悲劇』が東京に新しく出来た銀座セゾン劇場に、今かかっている。

これはご存じビゼーの『カルメン』を「演劇的に集約したもの」だが、さすがブルックだけに、出来栄えの高い水準のものになっている。以下、批評でなく感想を自由に書かして頂くが、まず誰かに「まだ見てないけど、どうしよう？」ときかれたら私は「とにかく聞いてらっしゃい、おもしろいから」と返事するだろう。

一言でいって、原曲を相当かりこみ、オーケストラを縮小、装置も極度に簡略化し

象徴にまで高めた舞台にしているが、音楽のさわりはよく拾っているし、新しく加えたエピソードや結びには新しく音楽が書き加えられている。

それだけでなく、カルメン役には六人用意したというが、写真でみると六人が六人まるで違うタイプである。私の見た夜はデラヴォーという長身のフランス美人で、日本ならさしずめＴＶ劇の人気女優といったタイプだったが、人の話ではある夜のカルメンは「オッパイの巨大なブロンドのグラマーでまるで西部劇の登場人物だった」という。思うに、複数のカルメンを使ったのは、カルメンの悲劇を特定の個性の運命に限定せず、数多くの女性に起こりうるものと見たためではあるまいか。そうして、タバコ工場その他彼女の社会的背景に関しては極力切り落とし、彼女を専ら疎外はされてるが、恋に生き恋に死んだ女として示している。

ところでカルメンの悲劇は「ホセの悲劇」でもある。ホセは故郷で待つ母や可愛い許嫁（いなきが）があり、軍隊に入っても伍長にまで勤め上げた人物である。その男が突如ある女に魅せられ、一切を投げうって、彼女と共に生きようと覚悟する。これもまた世の男性にとって身に覚えのあるものではあるまいか、実行に移すか否かは別として。

私事で恐縮だが、私は、まだ学生だったころ父につれられ樺太の敷香（シスカ）というところに

いったことがある。当時は日本とソ連の国境の町だった。そこで土地の人にすすめられ、近くの少数民族の住む集落を見にいった。そこには赤毛で真つ白な肌の丸顔のオロチヨン族の少女がいた。真つ黒な髪に漆をぬったように黒光りする瞳のギリヤーク族の娘さんもみた。その夜宿に帰ってからその瞳の光が目から離れず、このまま親も大学もほうり出し、あすこにいつて暮らしたらどうだろうという空想にとりつかれ一晩中まんじりとしなかったものだ。

たいていの人間は世渡りと恋の間で何とか妥協点をみつける。だが、ホセは別世界にとびこんだ。もっとも、さすがの彼も一度は軍隊（つまり世間）と恋の板ばさみに悩む。オペラではそれがききどころの一つになるが、そのあと二人が結ばれるシーンはない。だがブルック版にはそれがある。男の躊躇をみてカルメンは愛想づかしをして、ほかの男と寝にいつてしまうと、ホセは例の「花の歌」を歌う。それにほだされ、カルメンが出て来て、二人は抱擁する。そこに黒衣の女が登場、砂の上に幾つもの火をともし、円い輪を描くと、二人はその輪の中の床の上に横になる。深い闇と揺れる火が妖しい美をつくり出す。

こういったものには象徴的な意味が与えられてるのだろう（砂は人間の営みの空し

さ、はかなさの印？)。それに、全体が快速調で進行するこの劇の中で、このあたりはテンポがゆるやかな上に、あとに続く『アルルの女』からの牧歌風の間奏曲も重なって、長いアンダンテになっている。

全体にこの劇の歌手俳優たちの声は、今日の大歌劇場の水準になれ、ぜいたくになった私たちの耳には決して上等に響かない。このホセの声も悪くないが、高い方は苦しそうで、時々割れさえする。カルメンも男という男を虜にする「ハバネラ」その他の歌がもう一つピリツとせず、ゾツとするようなエロティシズムはない（もつとも本格的なオペラの時だって、そんな歌手はまれだ）。ただし、この公演で彼女が歌うと、とたんにその歌が「芝居」になる。声をきかすのでなくて「演じる」のである。ホセはその逆。彼があゝの「花の歌」を歌うと、しみじみとした情感が場内にみなぎり、それにひかれてカルメンが戻るのが不思議でないばかりか当たり前でしかないように思われてきて、満員の客席がしんと静まりかえり、息をのむ。『カルメンの悲劇』は実によく出来ている。しかし、急所はやっぱりビゼーの音楽の力に頼っており、ブルックはその音楽の生かし方に新機軸を開いたのである。

だが私には、こういう上演の仕方がオペラ『カルメン』にとって代わってしまう日

が来ると想像しにくい。ブルックは「オペラでは巨大なオーケストラと指揮者が舞台と客席を分断してしまう」というそうだ。「演劇」の側からはそうなるのかもしれない。それにオーケストラがこんなに小さくてすんだら「オペラはいつも赤字」「オペラはスター歌手の出来次第」という問題に一つの解決の示唆にはなるだろう。だがオペラ好きからいえば、オーケストラと指揮者は舞台と客の交流を拡充深化する扇の要なのである。この公演でも最終幕が闘牛士の音楽で誘導される時、拡声器のヴォリュームをいっばいに上げガンガン鳴らされていたではないか。それにオペラでは死の予告の切り札「トランプの歌」が三重唱で歌われたり、ジプシーの五重唱があるが、あれは決してぜい肉なんかじゃない、大事な劇の一駒なのである。

このあとブルックでは結びに強力な驚きが仕掛けてあるが、それは書くまい。それより闘牛士の登場の歌が、普通なら景気のいい行進曲で終始するのに、この演出では後半が小声で暗く歌われ、どこからともなく死の影が射してくる感じになる。これも「歌で芝居さす」すばらしい例。

終わったら近くで「たかが恋の話なのに何てご大層な！」という声がした。じゃ、なぜカルメンなんか見にきたんだろう？

昨日も今日も財テクの話の出ない日のないみたいな「経済大国」の大新聞にも、恋の恨みの話はよく出る。それに恋の悲劇は何もきつたはったにだけあるわけじゃない。昔読んだハイネのもじりを一つ。

男は娘が好きだった

娘は男が好きだった

男はそれを言わなんだ

それで娘は知らなんだ

恋の悩みに耐えかねて男はまちを出ていつて

ひっそり暮らし ひっそり死んだ

恋の重荷に耐えながら娘はまちに居残って

ひっそり暮らし ひっそり死んだ

風よ、この知らせ、どこの誰に伝えよう？

ヴィーンのオペレッタ

名古屋にいつてヴィーン・フォルクスオーパーの日本公演初日を見てきた。シュトラウスの『こうもり』とレハールの『メリー・ウィドー』の二演目だが、どちらも負けず劣らずの大熱演となり、おもしろく楽しく、申し分ないご馳走の大盤ぶるまいに出合った心地である。

今度の公演にはあちらでよほど氣を入れて準備してきたものと察しられた。私はこのオペラ団の舞台はこれまで二、三回しか経験してないので保証の限りではないけれど、ヴィーン独特の良さの上に、現地ではかつて味わえなかった「きちんと整った」演奏が加味された感じである。何よりこのオケが最初の音から終わりまで、ぴったり揃っているなどというのを耳にするのはじめての経験だが、それに限らず、万事が